報告１

経済成長下のインド社会と政治
「中間層」と民主主義

押川 文子
京都大学名誉教授

私はインドを中心に話をさせていただきます。下の写真は、デリーの郊外の新興の開発地域で、ショッピング・モールの前を牛が歩いているという、現代インドを象徴するような写真です。

2000年代に入って、インドの経済成長はかなり注目を集めるようになってきました。先日も、ニューヨークで国連常任理事国入りをねらう国家の一つとして安倍晋三首相を含めた会合に参加しているモーディー首相がニュースに出ていましたが、国際的にも注目され存在感をもつ国家として評価されるようになってきています。私がインドの研究を始めた1970年代、インドというと「精神性」に注目するか、でなければカーストと貧困を強調するか、という時代でしたので隔世の感がある昨今です。

BRICsという括り方をした場合、とくにその政治的な安定性を比較するといった視点からみると、インドは他のBRICs諸国とはかなり違う要素がいくつかあります。また、インドがこのまま順調に進めるかどうかを考えると、国民のなかの格差や不平等がある程度縮小して、この巨大な国の潜在的な力、つまり十数億人の規模の経済ができるかという点にかかっていると思います。というわけで、今日はインドの民主主義と国内の格差の問題、階層の問題を考えながら、BRICsのなかでのインドの一つの特色を考えてみたいと思います。

ショッピング・モールの前を歩く牛〈デリー郊外　報告者撮影〉

比較のために①
――インドの民主主義

インド人がもっとも好きなフレーズの一つは、「世界最大の民主主義国」という言葉です。人口だけをみても、あと20、30年経つと中国を抜いて、インドは世界最大の人口大国になってきます。

人によって評価は分かれますが、インドの民主主義は、一定程度の定着はしていると私は考えています。ただし、なにをもって民主主義とするかというのは難しい問題ですので、いくつか分けて考えてみます。

一つは政治的な制度としての民主主義的な枠組み。つまり、選挙がきちんと実施され、選挙による政権交代が可能、政党のような団体が認められていて、言論の自由の下で活動できる、といったことです。これに関しては、インド独立以前も含めると80年から90年の伝統がすでにあります。独立後をみますと、普通選挙制は定着し、いま申し上げたような制度的な民主主義は、1970年代に約２年間ほど危うくなった時期があったもののそれ以外はほぼ一貫して守られてきました。おそらくBRICsと呼ばれる国のなかで、この要件を満たしているのはインドだけだろうと思います。

それから制度を支える一定の基盤、たとえば活発な市民社会の活動、メディアによる政府批判も存在しています。また三権分立もたぶん日本以上にしっかり機能していて、政府に対してしっかり違憲判決を出せる、そういう司法をもっています。司法の重要性は日本以上です。たとえば公害問題や人権侵害に関して、被害を受けた当事者ではない第三者が最高裁判所に提訴して調査をさせる項目も含んでいます。

三つ目に、言い方は難しいのですが、こうした民主主義の歴史的な定着を背景に、インドという国家にとっては、民主主義がある種の神話性をもってきているようにもみえます。日本でも、実態はどうであれ「平和国家」を数十年標榜していると、その根拠は少々怪しくてもある種の枠組みを規定してきたということがあると思うのですが、インドにとっての「民主主義」

にも似た面があります。インドの民主主義をどのように評価するにしろ、民主主義というのはインドの国家に、いわば「織り込みずみ」の価値になってきた、ということです。政治家の発言、政府の文書、行政文書などなど、実態はともかく、また意図しているところはどうであれ、少なくとも「民主主義」という言葉は入れなくてはならない、といってもよいかもしれません。

実態としても、「民主主義」を疑わせるような事象は数多く経験しているのですが、制度的な民主主義は基本的に存続してきましたし、政治の大衆化が進むなど少しずつ進化をしている面もあります。「民主主義」という価値観が国家と社会に一定の定着をみているということです。現政権の動向も含めて、これからもいろいろなことが起きるとは思いますが、インドが完全な独裁国家になる、あるいは軍政のような政治体制をとる、ということはあまり考えられない、と私は思います。

ただし、「これが民主主義だ」と言われていたものが70年間変わらなかったわけではありません。制度もいろいろ変わってきましたが、それ以上に制度を支えている人たち、アクターの組み合わせは大きく変わり、民主主義の内実も変わってきました。

ネルー時代と呼ばれている1960年代半ば頃まで、制度としての民主主義を導入し支えたのは、ネルーが代表しているような近代西欧型の知識を身につけたいわゆる「インディアン・ミドル・クラス」と呼ばれた英語で考えるようなごく少数の人びと、農村の有力層、インドの民族資本――これは独立後には財閥のようなかたちで成長していきますが、そういったグループが結合した動きでした。

1960年代後半から1980年代にかけて、インドは政治の大衆化を経験します。独立後20年、30年を経て、ネルー時代よりも広範な人々が、様々な政党を作って投票行動に参画するようになったということです。

これはデモクラシーの進化であるとともに、ネルー時代に比べてインドの政治は賑やかに、ある意味では混乱とも、いきいきしている、ともいえる状況になります。地域的な主張、カーストや農民といった多様な軸で結集を図る政党が現れ、ときには流血の事件なども起こしながら、政治的に新しいかたちを探る時代が20年、30年続きました。一言でいえばアイデンティティ・ポリティクスなのですが、インドの場合、利害をともにしたり社会的な出自をともにしたりする人たちが、アイデンティティを掲げた政党を作って制度的な民主主義に参画する、という傾向がかなり強かったのではなかったかと思います。

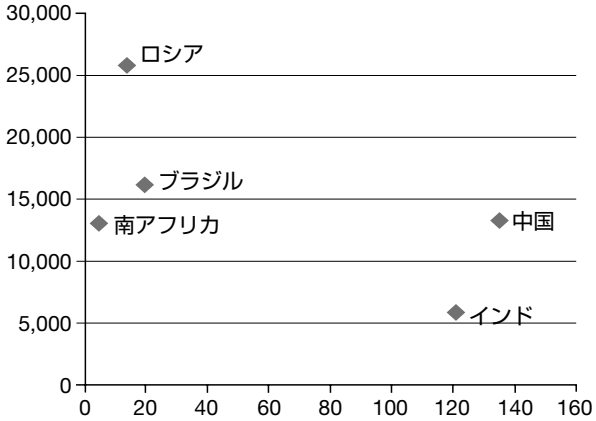
多くの途上国では、集団的な政治的要求がともすると議会制民主主義の枠を通り越して、あるいは、そうした要求を抱え込むほど議会制民主主義が定着していなくて、制度外にはみ出して収拾の難しい暴力の連鎖や独裁政権、軍政などに帰結してしまうことが多かったのですが、インドの場合はかなりひどい暴力や抑圧があっても選挙という制度はなんとか存続してきたわけです。選挙による政権交代は、国家のレベルから市町村にいたるまでほぼ定着してきました。もちろん、その過程において、多くの暴力的状況も生まれ、弱者からみれば「民主主義」とは言えない深刻な事態も何度も経験しますが、選挙制度自体は崩壊しませんでした。

ただし、このようにインドの民主主義を評価するにせよ、「政治制度としての民主主義があっても、大きな格差や不平等のもとでは民主主義とはいえない」という基本的な問いは、いまも有効だと思っています。言い換えれば「誰にとっての民主主義だったのか」ということです。この点に関連して基本的には出自集団であるカーストや宗教、地域を結集の軸とするような集団が大きな意味をもつときに、西欧的な民主主義のモデルが前提としている「個としての市民」がどう形成されるのか、あるいは他のかたちの民主主義の基盤がありうるのか、という問題もあると思います。

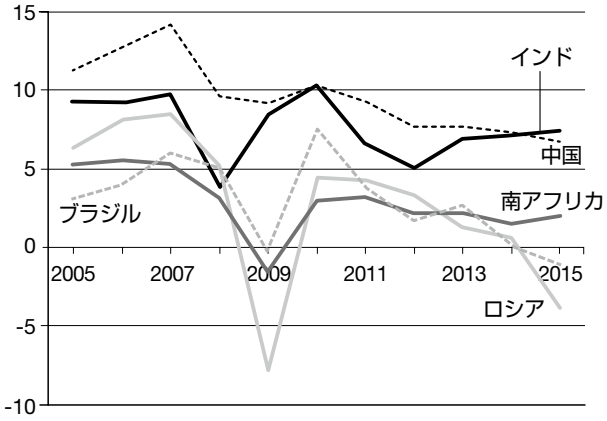
比較のために②
――BRICs諸国のなかのインド

これまで述べてきたように、インドの「民主主義」の問題は、政治制度としての側面と切り離せないかたちで、格差や不平等の側面を持っていますので、経済についても簡単に触れておきます。まず基本的なこととして、インドはBRICsのなかでは格段に貧しい、ということを確認させてください。購買力平価で見たインドの一人当たりGDPは、中国の約半分という状況です（資料１－１）。BRICsのなかには、人口が２億程度までで一人当たりのGDPがかなり高いグループと、人口も大きく一人当たりにしてもかなり伸びている中国がありますが、インドはまだ圧倒的に貧しいBRICsだということです。

資料１－２のグラフは、経済成長率の伸びを国連統計で、ざっと大雑把に見たものです。ここ数年、他のBRICs諸国が大いに変動したあげくやや下降気味なのにくらべて、インドはほぼ横ばいをなんとかキープしています。2009年の経済危機も、インドの傷は比



資料１－１　一人あたりGDP(購買力平価 US＄)



資料１－２　最近の経済成長率(2005～2015)

較的浅い。つまりインドは国際経済のアクターになったとはいえ、まだその程度は比較的浅く、ある意味では国際的な経済変動の影響がまだ比較的小さいということです。ロシアなどの大きな変動の幅にくらべると、インドの経済成長は緩やかだとも、安定しているともいえます。

比較のために③ ――経済成長と階層構造

インドは1991年に経済自由化をしますが、その効果が実際に目に見えるようになるのはだいたい2000年前後です。経済自由化がどのように国民生活に反映しているかを判断するのにもっとも重要な点は、雇用市場、収入の構造を見ることだと思います。これについては木曽順子さんがきれいにまとめた論文[木曽 2015]が５つのポイントに分けて整理しておられますので、紹介させてください。

一つは、産業構造は大きく変化しているけれども、就業構造はそれに伴わず、非効率な農業部門が残されている、という点です。産業構造をみると、中国が圧倒的な雇用吸収力をもつ製造業を中心に成長したのにくらべて、インドは主にサービス業、それも雑多なサービス業が中心でした。また、安定的な常用雇用者はほとんど伸びていない。都市部の女性の就業率が微増している程度です。また、インドでは「組織部門」という用語がつかわれますが、一定規模以上の企業や公務員雇用で働いている就業者の割合も全就業人口の約７パーセント程度で、この間ほとんど変わっていません。

第二点は、にもかかわらず小さな組織部門とインフォーマルな非組織部門のうち比較的専門性の高い分野を中心に、都市部ではホワイトカラー層がかなり成長し、農村部では1970年代には30パーセントから40パーセントあった貧困線以下人口の比率が、10パーセントを切るところまで減少するなど、格差を伴いつつも所得上昇もみられたという点です。

ただ、貧困層の所得上昇は限定的です。最近、宇佐美好文さんと本を編集しまして、そのなかで宇佐美さんが全国標本調査という全国規模の大型調査を詳細に検討してまとめておられますが[宇佐美 2015]、下層をみると貧困線はクリアしたけれども、そのちょっと上ぐらいに溜まっています。インドの民主主義にとって最大の課題であった格差の問題という視点からみると、都市部を中心に豊かな生活を享受できる人が形成されているものの、下層の底上げは限定的で圧倒的な多数は豊かな消費生活を享受するには至っていないということです。この本のなかには、たとえば食品や着る物の消費が過去20年、30年でどのくらい伸びたか大型統計を使ったかなり細かな分析も含まれていますが[杉本 2015]、[伊藤・押川 2015]、驚くほどインド人は贅沢になっていない。所得が伸びた分は、社会政策の貧弱さを補う消費、つまり教育や医療に回されているのが現状です。

中間層の政治意識① ――ヒンディー語商業映画

インドの経済成長については、いわゆる「中間層」の形成が注目されました。BRICs諸国の政治的安定という視点からみても、どの程度安定的な中間層が形成されているかという点は、おそらく共通する視点の一つだと思います。先ほど申し上げましたように、インドの中間層は形成されてはいるが、その下にはまだ豊かになれない膨大な人口が存在している、つまり安定した中間層が社会のマジョリティとして存在できるのはまだほど遠い状態です。

中間層について影響力のある論を展開しているLeela Fernandesは、中間層はそれ自体として規定されるというよりも、他者、とくに貧困層との差異化によって、そのアイデンティティを得ていると論じています［Fernandes 2016］。国内では貧困層を他者化するということは、自分たちの価値観を共有する相手はもっとグローバルなところにいると考えることにつながります。比較的力を付けてきた新しいインドのなかで、世界に通用するような「市民的」価値観でインドの伝統をもう1回解釈しなおそうとい傾向があるように思います。それはある意味では、国内での差異化とセットになったグローバル性といえるかもしれません。なかなか実証は難しいのですが、時代の気分を反映するものとして映画が面白い、と考えています。

インドの映画についての細かい話は時間の制約で省略させていただきますが、2000年代に入ってインドもシネマ・コンプレックスの時代になり、それまでのワン・スクリーン上映で前提とされていた広範な観客ではなく、観客ターゲットを絞った映画、とくに中間層向けの映画が明確にあらわれてきました。ここでご紹介する『English Vinglish』もその一つです。

この『English, Vinglish』は、日本でも上映されました。ストーリーは資料1－3に書いておきましたが、インドの普通の主婦がもっている家族愛は、ニューヨークのような「世界」でも通用するというストーリーです。主人公の「主婦」は、英語が話せなくてコンプレックスをもっていたのですが、ニューヨークの英語教室で、世界各地から来た人々、とくに「特別視」の対象となりやすいムスリムやホモセクシュアルといった人々や「貞節」を重視するインド女性にとってはとても厄介な「フランス男性」と友達になり、多様性を認めることの大切さを通じて「インドの主婦」としての自信を回復する、というストーリーです。同時にインドという社会を再解釈して、インド人として誇りをもつというよくできた映画です。この映画は、海外でも評判になりましたが、国内の興行成績もよく、シネマ・コンプレックスで映画を観るような都市部を中心とする中間層、とくに若者や女性の心性の一端を示しているように私には思えました。

中間層の政治意識②——モーディー政権

では、こうした中間層のインドの「市民的」再解釈と「インド文化」に対する自信は、政治的にみるとどういった意味をもつのでしょうか。そこにはおそらくいくつかの異なる方向性があると思います。

一つの方向は、2014年の下院選挙で、モーディー政権を圧勝させたような方向性です。インドは完全な小選挙区制をとっていますので、議席獲得率と実際の票獲得率にはかなりの乖離がありますが、政権支持率は現在もかなり高い水準にあります。

モーディー政権は、一言でいえば、新自由主義的な経済政策とナショナリスティックなイデオロギーを重ねた政権です。そのナショナリズムの基盤として強調されるのが「インド固有のすぐれた文化」なのですが、それはマジョリティの文化、つまりこの政権が「ヒンドゥーイズム」と想定する文化のことであり、文化の名においてマイノリティを排除するという方向をもちやすいわけです。政党としてのインド人民党（BJP）と連携する形で、かなり暴力的な傾向をもついくつかの団体やNGOのかたちで活動するグループなどが活動しています。政党としてのBJPは、「Make in India」といったスローガンを掲げて経済政策に期待をもたせながら、「ヒンドゥー主義」については、その文化的な卓越性や国際的価値を前面にしてソフトなイメージ戦略をとっているのですが、その背後にはハードな、あるいは暴力的な面を他の団体が担っています。この複合的なかたちで、右から中道までのかなり広い層の支持を集めているわけです。

ソフトな「ヒンドゥー主義」イメージ戦略にとって、国際性は大きな要素です。つまり、インドには世界に誇るべき文化があり、欧米の人々もそれを認めてい

資料1－3　*English, Vinglish*（2012）

監督：Gauri Shinde（女性監督。これが処女作）
制作：R. Balki 他／**配給**：Eros International／**主演**：Sridevi
概要：Shashiは会社員の夫と私立校に通う二人の子ども、姑と暮らす料理好きな中間層の主婦。ホームメード菓子を作って売ったりしているが、英語が話せず、夫や子どもからもばかにされている。ニューヨークにいる姪の結婚式の手伝いで1か月ニューヨークで暮らすことになる。悔しい思いをした彼女は一念発起、英語教室に通う。そこは、フランス、アフリカ、アジアから多様な人々が集い、先生はホモセクシュアル。次第にこの多様なグループに共感が生まれ、彼女の英語も上達する。Shashiは何よりも妻の役割を重視しながらも、姪の結婚式では「夫婦は平等、互いに尊敬して」と英語で挨拶。夫や子どもも反省する。かつてのアイドル女優Sridevi の15年ぶりのカムバック映画として話題を集めた。

- 家庭しか知らなかったShashi、でもインドの家庭の「愛」、「奉仕」は、アメリカでも人々を繋ぐ力がある、妻と夫は平等、そして女性も努力して能力と自信をつけるべき……という「正しい」メッセージが楽しくポジティブにつづられる。
  インドの女性規範の「グローバル」、「市民」的な再編物語の典型。
- 「中年女性」が主役になる映画。

る、というわけです。それはインドのマジョリティの文化の優秀性ということでもあり、マイノリティへの圧力にもなります。こうした戦略を象徴しているのが、今年(2015年)の6月に政府主導で大々的に実施された「国際ヨガ・デイ」でした。ニューデリーの大統領官邸からインド門にいたる大きな広場をヨガをする人で埋め尽くして、その真ん中にモーディー首相がいる、という構図の写真がインド各紙にあふれました。

ヨガを日常的に実施しているインド人はかなりいますが、精神性や「文化」というよりも健康にも気分にもよい運動として個人個人で取り入れている人が大半ではないか、と思います。こうした日常的に広い層が親しんでいるものに、「国際」と名を冠して、公共の、それもかなり目立つ公的な場で大規模な集団的パーフォーマンスとして組織して、その準備段階、当日、後日談までマスメディアだけでなくSNSなど様々なメディアで喧伝する、というのはまさにBJPらしいの戦略です。もちろん世界各地で呼応した催しも行われていまして、ヨガを介して「インド文化」と、その「担い手」のBJPを称揚する、という催しでした。

先に映画『English Vinglish』に言及したときに、「インド文化」を体現する役の中年の主婦の美徳は世界に通用するんだ、という映画のつくりを紹介しましたが、この国際ヨガ・デイにも一脈通じるものがあります。『English Vinglish』は、人種、ムスリムを含む宗教集団、個人の性的アイデンティティなど、いささか教科書的ではあれ、欧米社会で認められてきた人間の存在や生き方の多様性と親和性をもつものとしてインドの文化が提示されていました。国際ヨガ・デイにはこうしたメッセージ性はもちろんないのですが、ヨガ自体はインドの内外で広い範囲の人々が日々親しんでいる身体プラクティスで、それ自体は通常では「排外的」な意味をもつものではなく、むしろ近代医療の限界を補う伝統的な知恵として受容されているものです。その意味では、ヨガは、受け入れられやすいシンボルといえます。

私は、『English Vinglish』と国際ヨガ・デイは、かなり違うメッセージをもちながらも、その両方に共感する人々もかなりいるのではないか、言い換えれば『English Vinglish』の市民的イメージは、国際ヨガ・デイとも共存できてしまうのではないか、と思えてなりません。もし『English Vinglish』の舞台がニューヨークではなくインド国内のどこかの街で、実態としての「多様な人々」と共存することをアクチュアルに描いたならば、この共存は難しかったと思います。BJP政権、とくに過去において大きな疑惑をもつモーディー首相が一定の「人気」を維持できている理由のひとつは、国際性を強調した「文化」の再解釈やその政治的利用にあるのではないか、ということです。

中間層の政治意識③ ――デリーの「市民政党」

上記とは少し異なる動きとして2015年にデリー州の州議会選挙で大勝した「庶民党(Aam Aadami Party(AAP))」という新しい市民政党を紹介します。これまでのインドの選挙は、東部の西ベンガル州や南部のタミルナードゥ州などを除けば、インド人民党と国民会議派という二つの全国政党に地域政党やカースト・コミュニティなどに基盤をおく地域的な政党が絡んで展開することが多いのですが、今年(2015年)のデリー州選挙は、汚職追放キャンペーンで一躍政治的注目を集めるようになったAAPがまさに主役の選挙でした。イメージとしては、経済成長を経て美濃部都政が登場する動き、つまり既成の政党ではなくて、都市の住民が都市の都合で市民政党を作る動きに似ているかもしれません。今回の選挙では「パーニー・ビージリー(水と電気)」がスローガンになりました。イデオロギーではなく、日常の都市生活を改善してほしいという住民の要望に訴えたのです。

私はこの政党が勝った直後にちょうどデリーにいまして、連日様々な報道がされていました。これまでインドで「市民」というと、英語をしゃべる、いわゆる「市民的な人」という感じだったのですが、このグループは「市民」ではなく「庶民」と自己規定しているんですね。もちろんかなり広範な層を含んでいるのですが、ヒンディー語で生活する最下層というわけではなくそのちょっと上から中間層あたりの人々、日々食べるには困らないけれども、けっしてエリートではない人たちが、SNSやインターネットを使ったキャンペーンを展開して大勝利を導きました。反汚職、「水と電気」、あるいは都市の住環境や災害対策といった日々の課題を取り上げて結集がみられたこと、既成政党が組織できなかった「庶民」たちが選挙で大活躍したことなど、新しい都市的な政治のありかたを体現したという意味で、注目される出来事でした。

同時に組織化という点では始まったばかりで、すでに内紛なども伝えられています。もう一つの課題は、反汚職、あるいは都市の基盤整備といった誰もが必要

と認める点で結集した政治の動きが、モーディー政権が掲げるような「ヒンドゥー主義」にどのよう対応していけるのか、という点です。すでに言及したように、インド人民党の「文化戦略」はかなり複雑で、市民的な価値観を取り込む面もあります。いまのところAAPは是是非非の立場のように見受けられますが、多様性な人々を「包摂」するために、どこで線を引けるのか、という課題は残っているように思います。

世界最大の民主主義国の未来を握る「市民主義」のゆくえ

BRICs諸国の比較、ということで、インドからは「世界最大の民主主義国」に関連する問題をいくつか取り上げました。確かにインドの民主主義は手間がかかり、急速な経済成長には阻害要因となる面もあるかもしれません。しかし、この多様な要素を含む国家に暮らす人々にとって、また国家自体にとっても、「民主主義」は最大のアセットのように思います。いわゆる市民的な――個人として人権や自由や多様性を認めて、女性の権利やホモセクシュアル、そういういろいろなものを含んだ、ある意味でグローバルな市民的な意識や権利は、商業映画に描かれて受容されたり、都市「庶民」政党が勝利したり、とインド社会にかなり浸透してきていることを報告しました。

そしてその「市民主義」には、いくつか危うさもある、とも申し上げました。今日はあまり触れませんでしたが、そういった市民的な感覚に自助の精神とか新自由主義的な経済政策が結びついてあからさまな能力主義が喧伝されることもあります。国際ヨガ・デイのように、「文化」をまとったナショナリズムにかなり親和性をもつ事例もあります。同時に、この国の活発なNGOや言論などにみるように、社会の改革をめざす具体的な活動に帰結することもあるでしょう。

この多様な可能性をもつ市民主義が今後どのように展開していくのかという点に、近いうちに中国を抜いて世界最大の人口国になるインドが「世界最大の民主主義国」と呼ばれ続けることができるか否かがかかっているように思います。

引用文献

木曽順子［2015］「インドにおける『中間層』の形成と実態」『歴史と経済』第227号

近藤則夫［2015］『現代インド政治：多様性のなかの民主主義』名古屋大学出版会

中溝和弥［2012］『インド：暴力と民主主義』東京大学出版会

宇佐美好文［2015］「働く――就業構造の変化と労働移動」、（押川文子・宇佐美好文共編『暮らしの変化と社会変動（激動のインド第5巻）』日本経済評論社

押川文子・宇佐美好文共編［2015］『暮らしの変化と社会変動（激動のインド第５巻）』日本経済評論社

Fernandes, Leela [2006] *India's New Middle Class: Democratic Politics in an Era of Economic Reform*, Univ. of Minnesota Press.

Jaffrelot, Cristtpher and Peter van del Veer [2008] *Patterns of Middle Class Consumption in India and China*, Sage Publishers.

Donner, Henrike. Ed. [2011] *Being Middle-Class in India: A way of Life*, Routledge

Jeffrey Craig [2010] *Timepass: Youth, Class and the Politics of Waiting in India*, Stanford University Press.（佐々木、押川、小原、南出、針塚訳『インド地方都市における教育と階級の再生産』明石書店）

Desai, Renu and Romala Sanyal eds. [2012] *Urbanising Citizenship: Contested Spaces in Indian Cities*. Sage Publishers.